

〈研究・調査報告〉

## 短編アートフィルムに見る、日系ペルー人4世の眼差し

竹 藤 佳 世

### 【要旨】

この研究では2024年12月に開催された、日本人ペルー移住125周年&日本ペルー人移民35周年記念企画「日本で、ペルーで、歩んだ道」短編映画上映+シンポジウムにおいて上映された、日系ペルー人4世の2本の短編映画を取り上げる。

多文化環境で生きてきた若い世代が、どのように自らのルーツを捉え、映像によって表現しようとしているのか、またそこに表象される日本とペルーの歴史と文化について考察を行う。

キーワード：映像、アートフィルム、日系ペルー人

### 1. はじめに

2024年は日本人ペルー移住125周年、そして日本ペルー人移民35周年という年に当たり、日本とペルーの間で人々が交流してきた歩みを見つめ直す機会となるイベントが開催された。その中の一つが、2024年12月1日に城西国際大学紀尾井町キャンパスで行われた「日本で、ペルーで、歩んだ道」短編映画上映+シンポジウムである。今回取り上げる2本の短編映画は、ここでの上映作品であるため、このイベントがどのように開催されたのか、その概略を紹介しておきたい。

#### 「日本で、ペルーで、歩んだ道」

実施日：2024年12月1日（日）

場所：城西国際大学紀尾井町キャンパス1号棟・地下ホール（東京都千代田区紀尾井町3-26）

司会：長沢義文（ブエナワイカ）

プログラム：

- ① 13：30～14：00 「日本とペルー、125年のあゆみ」講演  
柳田利夫氏（慶應義塾大学名誉教授）
- ② 14：00～14：20 「ニシヤマ家のルーツを探して」報告

熊谷雄氏（JICAペルー事務所企画調査員／北海道大学大学院社会人大学院生）

③ 14：20～15：00 短編映画上映&監督トーク

ファシリテーター：竹藤佳世（城西国際大学メディア学部准教授）

上映作品：

『UBICUA』（大城成美監督／7分／2021年）上映後、オンライン監督トーク

『Yonseï』（Harumi López Higa 監督／10分）上映後、監督舞台挨拶

④ 15：20～16：20 「ペルーから日本へ35年のあゆみ」リレートーク

聞き手：比嘉バーバラさん（TVリポーター）

ゲスト：相沢正雄さん（株式会社アイザワコーポレーションCEO）

小波津ホセさん（日本ペルー共生協会理事長、獨協大学非常勤講師、  
ユービージャパン株式会社営業部長）

木本結一郎さん（株式会社ユニードス代表）

主催：ブエナワイカ

共催：城西国際大学メディア学部ドキュメンタリープロジェクト

後援：在日ペルー大使館、日本ペルー協会、海外日系人協会、JICA横浜 海外移住資料館

協力：Aizawa Group、NPO法人日本ペルー共生協会



図1 「日本で、ペルーで、歩んだ道」フライヤー（表・裏）

画像提供：ブエナワイカ（長沢義文 2024年）

このイベントの主催である、ブエナワイカ (<https://www.buenawayka.info>) は2021年から「ペルー映画祭」を日本各地で開催するなど、日本にペルー映画を紹介する活動を行っている。また共催は筆者が担当する城西国際大学メディア学部映像芸術コースの授業「ドキュメンタリープロジェクト」である。両者とも「映像」という共通する切り口から、日本とペルーの歴史的・文化的な交流を捉えるイベントにつながったものである。

実施にあたっては、「ドキュメンタリープロジェクト」受講学生が、映写や照明、音響、舞台進行、会場設営、ゲストアテンド、観客誘導、受付、記録撮影などにスタッフとして参加し、準備を重ねた上で当日の運営を行い、無事故で成功させることができた。

次に筆者がファシリテーターを務めた、短編上映作品について触れていきたい。

## 2. 短編作品『UBICUA』

『UBICUA』(大城成美監督／7分／2021年)

作品紹介：監督は群馬県太田市生まれで、沖縄ルーツの日系ペルー4世。12歳まで日本で暮らし、その後ペルーへ「帰国」。本作は、監督が日本で「外国人」として生まれ育ったのち、初めて暮らす「母国」ペルーへ渡り、「よそ者」として過ごした経験を共有するセルフドキュメンタリー(フライヤーより引用)。

「UBICUA」というのはガリシア語やスペイン語の形容詞で、「どこにでもある」という意味を持つ。映画の中ではタイトルのあとに「ユビキタス あらゆるところに同時に存在する。」というテロップが表示されるが、これは日本、ペルーと移動しながら育ってきた大城監督自身のことを形容していると解釈できるだろう。あるいは監督のように多文化環境で生きてきた「サードカルチャーキッズ」と表される人たちが「あらゆるところに存在する」時代であることを表しているのかもしれない。

この映画の構成の巧みな点は、音声とテロップの文字情報による言語の使い方、あるいは使い分けが良く練られているところにある。日本語のナレーション(スペイン語字幕)とスペイン語のナレーション(日本語字幕)が交互に入りながら進行する、この映画の形式自体が監督の生い立ちや環境を物語るのに有効な表現方法になっている。作品内での大城監督による日本語のナレーションはイントネーションなど日本語ネイティブスピーカーのものであると同時に、スペイン語のナレーションも非常に流暢に感じられる。

このことにより、主な視聴者として想定される日本人・ペルー人の両方にとって、近い言語と遠い言語が等分に配置される、親密さと違和感が入り混じった不思議な感覚を味わうことができる映像になったのではないだろうか。

折り紙で「飛行機」を折る女性の手から始まるこの映画は、時々インサートされる「空」や実際の「飛行機」のイメージなどでブリッジされながら、以下のようなキーワードを元に進行していく。

「rebobinar 巻き戻し」

「allá 向こう」

「aquí ここ」

「despegar 離陸」

「turbulencia 乱気流」

「aquí y allá ここ、向こう」

「atterrizaje 着陸」

言葉と映像のコラボレーションによる、遠くまで飛んでいく飛翔のイメージと共に、どこか不安定に揺らいでいるようなイメージもまた、これらの映像によってもたらされている。

この映画では監督が言語を「日本語」「スペイン語」「ペルー語」という言い方で表現している。実際にはペルーには「ペルー語」という言語はなく、先住民族の言語としてケチュア語やアイマラ語などがある。しかしこの映画では監督が子ども時代、日本で過ごしていた際に、日本人の友達にペルーの親戚と話す際に使う言葉を「ペルー語」と表している場面がある。このため、ここでいう「ペルー語」は、スペイン語も含め広義に「ペルーで使われている言葉」を表現するための言い方であると解釈できる。

また映像と音声の関係について見ていくと、前半は主に日本の風景や子ども時代の画像にスペイン語のナレーション、後半はペルーの街角やバスの車内といった映像に日本語のナレーションが付けられることが多くなっている。こうした、場所とそこで語られる言葉が相反する、ねじれた状態は、映画の中で語られる「どこの人なの?」「この人じゃないみたい」という言葉が示すように、監督が体験した、どちらの国においても異邦人であるというねじれた感覚を想起させるものである。

こうした表現の裏側にある、監督の体験について、「ディスカバー・ニッケイ」に掲載された、監督へのインタビューに基づく記事「あらゆるところに遍在する日系アーティスト：ナルミ・オグスク」(エンリケ・ヒガ・サクダ 2023年2月3日)から紹介したい。そこでは、『ウビクア (UBICUA)』という単語には二つの意味がある。その一つが『あらゆるところに存在し、常に動いている(行動している)人』という意味である。」という説明に続いて、監督の生い立ちから作品制作に至った経緯が述べられている。以下、同記事より引用する。

「ナルミは1996年、群馬県に生まれた。日系三世の両親が出稼ぎ労働者として、ペルーから日本へ移住したからである。

家ではスペイン語で会話をしていたが、外（学校や友達）ではすべてが日本語だった。彼女にとっては、日本語で会話をする方が楽だった。ペルーは、両親の祖国で時々休みに訪れる国であり、自分にとっては故郷ではないと感じていた。

しかし、2008年、ペルーに「戻る」ことになり、ナルミの人生は大きな変化に直面した。ペルー社会へ適応することはそう簡単なことではなかったが、地元の日系学校に入学したので、そのショックを緩和することができた。ナルミは、日系社会の中で日系人らと勉強し、活動を共にし、コミュニティのイベントでは歌を歌った」。

映画の中で語られていた、生まれた国（日本）とは別の国に「帰る」ことの違和感は、こうした家族の事情によるものであった。2008年の日本の景気悪化による影響で、大城家族と同様、帰国の選択をした日系人は少なくなかった。

この違和感が具体的に作品の形になるのには、映画には直接描かれていない、大学での経験が大きかったものと思われる。同じく、エンリケ・ヒガ・サクダによる記事から、当時の監督の状況を引用する。

「しかし大学に入学し、日本からペルーへ引っ越したときほどの衝撃はなかったものの、新たな試練に直面した。新しい学問の環境には日系人の存在はほとんどなく、無知からくるアジア人への偏見にさらされた。アジア系の違いを理解していないことに理不尽さを感じた。そこでナルミは韓国系の女性と共に、クラスメイトらにエスニック的な違いを教え、悪気がなくとも自分たちのことを「チナ（china、中国人や東洋人全般を指すことが多い）」と呼ばないように理解を求めた。幸いにもその目的は達成し、ナルミはその結果に満足した。

このような大学での経験が、自分のルーツやアイデンティティーについて表現する機会をもたらした。そしてクラスの課題の一つとしてドキュメンタリーを制作することになり、自分の生い立ちを取り上げることにした。そして生まれたのが『ウビクア（UBICUA）』である。大学の課題として作った作品ではあるが、映像作家のハロルド比嘉氏の誘いで、ペルー日系人協会開催の「若手日系アートサロン」で「ウビクア」を上映する機会を得たため、より多くの人に観てもらうことができ、注目を浴びた。」

こうして大学の課題の一環として作られた「UBICUA」は、2022年にペルー日系人協会主催『第6回日系若手アート展』に展示され、2023年には独立系映画製作者が映画祭、ショーケース、世界的な会員ネットワークを通じて独立系映画でキャリアを伸ばすためのプラットフォームである、「LIFT-OFF GLOBAL NETWORK」の2023セレクションに入ることとなった（映画冒頭に「LIFT-OFF GLOBAL NETWORK SESSION 2023 OFFICIAL SELECTION」クレジット）。

1世の日本からペルーへの移民、3世のペルーから日本への「デカセギ」など、時代の流れの中で日本とペルーを移動してきた家族の歴史。幼い頃からその痕跡を感じ周囲の「普通」の日本人との違いに違和感を抱いてきた監督にとって、それは様々な理不尽を押し付けられる根源にも感じられただろう。

そんな中、終盤に出てくる「ユビキタス あらゆるところに同時に存在する」という言葉には、そんな自分の存在を肯定して生きていこうとする意志が込められているように思われた。

現在の大城監督は、2022年からペルー・リマ市国際協力機構（JICA）に勤務しているという事で、彼女の明晰な思考が、ペルーと日本をつなぐ上で有用に働くことを期待しつつ、可能なら今後もアーティストとしての活動を行うことで、私たちに新たな知見をもたらしてくれることを望むものである。

### 3. 短編作品『Yonsei』

『Yonsei』（Harumi López Higa 監督／10分）

作品紹介：監督は沖縄系ペルー人四世で、現在は京都府在住。ペルーへの日本人移民の歴史の中に、曾祖母、祖母、母の経験を発見する。当時、さまざまな社会的課題に直面しながらも、新たな道を切り開いた（フライヤーより引用）。

『Yonsei』は、日系ペルー人4世の監督による作品であるが、4世の彼女自身より、1世（曾祖母）、2世（祖母）、3世（母）たちの歩んだ道を辿る映像がメインとなっている作品である。音声は、全編スペイン語だが、1世～4世という言葉は日本語のまま使用されている。

また存命の時に会うことがなかった曾祖母の時代から映像が始まることもあり、それぞれの写真とその変遷が重要なファクターになっている。

以下、作品の主な章立てから、それぞれの世代への監督の思いを辿っていきたい。

#### 「issei 一世」

家族の中で語り継がれる存在である曾祖母。写真でしか知らない曾祖父と結婚するためにペルーに渡ってきたその姿は、輝く海原から少しずつ見えてくる写真によって表現されている。会ったことのない曾祖母への監督の語りかけは、ゴッドマザーに対するものというより、困難な時代を生きた一人の女性への労りに満ちている。

#### 「Nisei 二世」

監督の幼い頃の記憶に存在する祖母。「おばあちゃん」としての姿から、若い頃の写真を通じて、親世代と違って恋愛結婚し農場から都市（リマ）に移住するなど、行動的に生きた女性

の姿が浮かんでくる。存命だった時には理解しきれなかった、祖母の言葉の意味が監督によって反芻される。

#### 「Sansei 三世」

写真はカラーへ変化し、父と出会った頃の明るく活発な若い母の写真から、娘（監督）の誕生という親子の写真に移りながら、娘に問題（障害）があることについてどう思ったか、という問いかけがなされていく。しかしその問いは、母を問い詰めるものではなく、むしろ「望まれて生まれてきた」と常に自分を肯定しながら育ててくれた母への気遣いであるように思われる。

#### 「Yonsei 四世」

タイトルとなっている自分自身については、1カットのみという、極小にしか触れないことで、監督がまだ若く母たちのようなストーリーを持たないこと、これからのストーリーに観客の想像を広げることを促しているように思われる。

こうした4世代にわたる作品をつくる上でのHarumi監督の背景とは何だったのか、「ディスカバー・ニッケイ」での「ハルミ・ロペス・ヒガ：アートによる発展とその包摂性」（ヒロ・ラモス・ナコ 2025年1月15日）の記事から引用して紹介する。

「ハルミが日系社会への関心を深めたいと思うようになったのは、ペルーの経済危機によって80年代後半から日系ペルー人が日本に出稼ぎに行くようになったからだ。日系社会についての研究を進めたことで、修士課程に進み、さらには日本財団の奨学金（ニッケイ・スカラー）を得ることもできた。」

ここでもまた日系社会にとって、「出稼ぎ」が大きなインパクトを持つ出来事であったことが伺われる。また映画の中では明確には語られていないが、Harumi監督は現在、日本の大学院に留学中である。そこでの生活や発見について、引き続き「ディスカバー・ニッケイ」からの引用で紹介する。

「日本での生活は、ハルミにとって新たな可能性となった。長年会っていなかった日本に住んでいる親戚や同胞と体験を共有することができた。ペルーの祝日や記念日を共に過ごし、在日ペルー人コミュニティのイベントに参加することで、自国への郷愁を満ち、とても快適に過ごすことができた。彼女は、『日本での生活はときには孤独を感じることもあります。だからこそそこにアットホームな温かさをもたらす必要があるのです』と話している。」

この作品は、メキシコのセセアチェロ映画祭、ブラジルの「しまんちゅ・ぬ・もあしび」

(Shimanchu Nu Mōashibi) サイト、マドリードのペルー映画祭などでも紹介され、2023年には東京ではじめて日本財団奨学生の会でも上映された。その後2024年11月に行われたペルー日本人移民125周年記念事業の一環として、日本語字幕を付けて神戸市外国語大学で上映され、2025年には、第2回沖縄環太平洋国際映画祭でも上映されるなど、今も各地で広がりを見せている。

現在京都に在住して学びながら、アートとコミュニケーションに関わり続けている Harumi 監督。曾祖母たちとは逆に日本を異邦人として訪れ、日本で学ぶ経験を通してこれからどんな眼差しを持つ作品を生み出していくのか、注目して行きたい。

#### 4. 二つの作品を通じて

『UBICUA』『Yonsei』の2作品に共通するのは、監督が4世という若い世代の日系ペルー人であること、女性であること、日本とペルーを行き来する経験をしていることである。

日本とペルーの同世代の比較ということで考えると、親戚や曾祖父母など、家族の歴史や背景について、こうした若い世代もかなり共有しているという点は、日本で育った日本人とかなり異なっているのではないだろうか。

もちろん、個別の家庭によって違いはあると思うが、日本の若い世代が多少なりとも関心を持っているのは、自分と親という近い関係ぐらいで、例えば身近にいても、自ら祖父母の世代の体験、経験に思いを馳せる、あるいは曾祖父母の苦勞に思い至るといったようなメンタリティを持つ人は非常に少ないと思われる。

この違いが何に由来するか答えは明確には出ないが、異国あるいは故国での困難な状況の中を家族の絆によって生き抜いてきた日系人の家族と、都会への人口流出、核家族化による親族関係や人間関係の繋がりの希薄さが進んだ日本人との違いが、4世代、125年の間に積み重なった結果なのかもしれない。

こうした日系ペルー人の視点を通して、過去の日本、そして今の日本が写し鏡として見えてくることも、こうした作品から得られる貴重な体験だと思われる。

#### 5. まとめと今後の課題

今回、日本人ペルー移住125周年、そして日本ペルー人移民35周年という機会に在日ペルー大使館、日本ペルー協会、海外日系人協会、JICA 横浜 海外移住資料館といった諸機関と協力してイベントを行えたこと、そこで若い世代の視点からの作品を紹介できたことは、大きな収穫であったと言える。学生たちにとっても、普段見ることができない、同世代の日系ペルー人監督のアートフィルムを見ることは、良い刺激になり、欧米に偏りがちな「海外」のイメージ

を変えることにもなった。

しかしながら、こうしたイベントを継続していくためには、人的な面での交流や情報交換を活発にすると同時に、映像上映時における字幕作成、ティーチインやシンポジウムでの通訳などの確保といった、金銭面での裏付けも必要である。

また、ペルー現地でのリサーチなど、研究面ではまだまだ材料が少ないという点も課題である。

今後、こうした点についてもケアしながら、外部にも開かれた形で研究を行なっていければと考えている。

## 6. おわりに：謝辞

最後に研究に協力していただいた、ブエナワイカの長沢義文氏、大城成美監督、Harumi López Higa 監督はじめ関係者に感謝申し上げます。

作品上映・シンポジウムの開催にあたっては、「ドキュメンタリープロジェクト」受講生である学生スタッフも大きく貢献したため、学生スタッフの名前を記載させていただきます。

〈映写〉 岩澤響子 菅原春菜

〈音響〉 大福美穂 齋藤源輝

〈照明〉 清水紗希 三浦柊花

〈案内・受付〉 高橋衣緒 藤井優衣 渡辺みかん

〈進行〉 大泉美藍 三輪あい

〈記録〉 宮川真実 吉田留美奈 桑森陽己

今後こうしたメディアを通じた国際的なシンポジウムの開催、研究などの継続を行っていくことで、国際大学としての活動を行っていただければと考えております。

## 【参考文献】

「ディスカバー・ニッケイ」

「あらゆるところに遍在する日系アーティスト：ナルミ・オグスク」エンリケ・ヒガ・サクダ  
(訳：アルベルト・松本) 2023年2月3日

<https://discovernikkei.org/ja/journal/2023/2/3/narumi-ogusuku/>

宇都宮大学 学術情報リポジトリ 国際学部 スエヨシアナ著

「日本での思い出とキャリア形成—ペルーの若手クリエイター6人の抱負とアイデンティティ」

[https://uuair.repo.nii.ac.jp/record/2000258/files/cmpps\\_16\\_078.pdf](https://uuair.repo.nii.ac.jp/record/2000258/files/cmpps_16_078.pdf)

LIFT-OFF GLOBAL NETWORK (<https://liftoff.network/>)

「ディスカバー・ニッケイ」

「ハルミ・ロペス・ヒガ：アートによる発展とその包摂性」 ヒロ・ラモス・ナコ（訳：アルベルト・松本） 2025年1月15日

<https://discovernikkei.org/ja/journal/2025/1/15/harumi-lopez-higa/>

「ブエナワイカ」 ホームページ <https://www.buenawayka.info/>

# The Gaze of Fourth-Generation Japanese Peruvians in Short Art Films

Kayo Takefuji

## Abstract

This study examines two short films by fourth-generation Japanese Peruvians screened at the “Paths Walked in Japan and Peru” short film screening and symposium. This event commemorating the 125th anniversary of Japanese immigration to Peru and the 35th anniversary of Japanese-Peruvian immigration was held in December 2024.

It considers how the younger generation perceives their roots and attempts to express them through film, as well as the relationship between Japan and Peru revealed in these works.

Keywords: Image, Art film, Japanese-Peruvians